

佐々木向陽『逸史俚諺』の考察(1) — 並河寒泉の序文について —

末 裕 昌子

Research on Shoyo Sasaki's "Itsushirigen" (Part1)

Masako Suematsu

1. はじめに

佐々木向陽(一八〇一〜一八六三)は、長州藩永代家老福原氏が宇部領内に設置した郷校の学頭となった人物で、^①幕末から明治にかけて巷間に流布した『標疏箋註蒙求校本』の著者でもある。^②名は景衡・玷、字は圭甫、通称は並枝、号が向陽である。^③向陽は、長崎の勝木という家に生まれ、^④江戸あるいは京阪遊学の途次に周防国の廻船業の港町・阿知須に滞留し、そのまま居を構えて近郷の子弟に講義を行うこととなった。^⑤その後、弘化二年(一八四六)、福原氏の郷校・善我堂に学頭として招聘されることとなったことから、領内の廢家であった佐々木家を継ぐ形で佐々木の姓を名乗るようになった。善我堂は、福原家二十三代親俊が、天保年間に領内の士民教育のために宇部村宇中村に設立した晩成堂を前身とする郷校で、弘化二年までに善我堂と改称され、福原邸内に移されたという。^⑥そして、善我堂で学頭を務める傍ら、安政五年(一八五八)に『標疏箋註蒙求校本』を出版したのだった。では、向陽は一地方に身を置きながら、『標疏箋註蒙求校本』の出版を可能にするような人脈を、どのようにして築いていたのだろうか。

先行研究が示す向陽の事蹟のうち、文事に関わる人物との関係には次のようなものがある。^⑦

- ① 頼山陽(一七八〇〜一八三二)が熊本で加藤清正公の碑文を草したとき、十三歳(あるいは十三四歳)の向陽が居合わせて図らずも学識の高さを示すこととなり、周囲を驚かせた。
- ② 熊本藩儒・辛島塩井(一七五五〜一八三九)の門に学んだ。
- ③ 二十歳の頃に各地を遊学し、江戸では曲亭馬琴(一七六七〜一八四八)に会って稗史小説に関する意見を開陳した。
- ④ 吉田松陰(一八三〇〜一八五九)の愛弟子であった荻野時行(通称貞介、号

松墩)を養子に迎えている。または、松陰の死を詠んだ漢詩がある。

ところが、これらの人々とつながりについては、検討の余地があるという。近年、桐島薫子氏は「佐々木向陽の伝記に関する諸問題(1)——著述類・三井誠之進『佐々木向陽先生傳』の紹介を含む——」^⑧で、先行研究を概括した上で、向陽の新たな伝記資料となる三井誠之進著『佐々木向陽先生伝』^⑨を紹介した。桐島氏はその論の中で、①山陽や②塩井との関係について、先行研究の問題点を次のように指摘している。まず、①山陽については、根拠の一つとなる山陽の「詩文」名が明らかにされていないという点である。氏が調査したところ、山陽が熊本で清正公を詠じたという「詩文」は見つかったものの、その時期に向陽は十三四歳ではなかったという。^⑩次に、②塩井の門人だったことについては、その根拠を問題視している。氏が調査したところ、山陽を通じて塩井と間接的なつながりがあった可能性はあるが、氏以前の研究はそれにも言及することなく、向陽を塩井の門人としているのだという。^⑪つまり、①②はともに、向陽と関係があった人物として取り上げられてはいるものの、その裏付けとなる資料は明示されていないのである。そして、同様のことは、③馬琴との関係についても言える。向陽が江戸で馬琴に会ったとする研究は複数あるが、筆者が見た限りでは、それほどの資料に基づくのかは示されていないかった。

したがって、向陽については、『標疏箋註蒙求校本』の出版における人的つながりどころか、吉田松陰とのつながり以外では、そもそもどのような地域のどのような文化圏の人達と学問的な交流や接点をもっていたのかすら、よくわかっていないというのが現状と言える。

二〇二三年一月二十三日(受理)

末 裕 昌子 宇部工業高等専門学校一般科准教授

二、『逸史俚諺』における並河寒泉の序文

桐島氏は「佐々木向陽の伝記に関する諸問題(1)——著述類・三井誠之進『佐々木向陽先生傳』の紹介を含む——」¹²⁾で、向陽の著作名として従来の研究で示されたことのない書名を挙げている。そのうち、『拭櫛集』『逸史俚諺』という著作は伝存が確認され、『歴代武將伝』なるものは所在が不明であるという。このうち、本稿では『逸史俚諺』を取り上げたい。なぜなら、国立国会図書館所蔵『逸史俚諺』¹³⁾を確認したところ、本書は近世大坂を代表する漢学塾であった懷徳堂六代教授・並河寒泉(一七九六—一八七九)の序を有していることが判明したからである。

『逸史俚諺』は、三十巻の写本(書写年代未詳)¹⁴⁾で、漢文体で記された徳川家康の一代記である『逸史』を、向陽が仮名交じりで訳したものである。『逸史』は、懷徳堂四代学主・中井竹山(一七三〇—一八〇四)が最終的な完成までに五十年をかけた著作であり、¹⁵⁾寛政十一年(一七九九)に幕府に献上された後、写本で流布し、幕府の役人にとっては学ぶべき必須の書となっていた。¹⁶⁾その後、竹山の外孫でもある寒泉によって、天保十三年(一八四二)に上梓の官許を得、嘉永元年(一八四八)に刊行された。『逸史』の公刊は、当時の懷徳堂の大事業の一つだったという。¹⁷⁾『逸史俚諺』における寒泉の序文は、この『逸史』刊行の翌年に記されたものである。以下に、国立国会図書館所蔵『逸史俚諺』の序文を翻刻し、あとにその【書き下し文】と【注】を記す。¹⁸⁾

逸史俚諺序

於戲、四海謳承平、二百有余年。于今矣、万邦無事、四民安業、皤皤含哺、熙々鼓腹者、是誰之沢与。既浴其沢矣、其德業之盛、豈可不知之乎。吾外祖逸史之撰、所由作也。

長州宇部文学圭甫佐々木君、遥寄其所訊逸史俚諺、求序予。予受説、欣然曰、「懿矣哉、訳也。鄙語不云乎、『明有千矣、盲亦千矣』。吾逸史之編、説而知之、唯明者能之、盲則不能。圭甫氏、蓋惜焉、国字之訳所以成与。吾逸史、曩已梓刻、則明者之可説而知者既博矣。斯訳而果布於海内乎。盲者亦得明能説而知者亦復博矣。則其流沢之入人也。益深矣。俚諺之作、盲俗間実不可欠者也。抑斯訳也、記事原辞、一仍本編、而其卷数亦得如本編。蓋以引蔓之国字、解含英之漢文、不得不覃葛綿々也。然、明而約如此、可謂善整治矣。所謂良工独苦者可知已。

夫若此圭甫氏之於逸史、非殆成癖弗得也。逸史既已素臣之業、乃知逸史氏九原之下莞爾、其将言我日東亦有一元凱矣」。是為

序、書以還送焉。

嘉永己酉四月日

浪華処士並河朋來撰

【書き下し文】

逸史俚諺序

於戲、四海承平を謳ふこと、二百余年。今に、万邦無事、四民安業にして、皤皤含み、熙々として腹を鼓するは、是れ誰の沢か。既に其の沢を浴するかな、其の德業の盛んなること、豈に之を知らざるべけんや。吾が外祖逸史の撰、由りて作る所なり。

長州宇部の文学圭甫佐々木君、遥に其の訳する所の逸史俚諺を寄せ、序を予に求む。予受けて読み、欣然として曰く、「懿かな、訳や。鄙語云はざるや、『明なるもの千有り、盲なるもの亦千あり』と。吾が逸史の編、説て之を知り、唯明なる者のみ之を能くし、盲則ち能はず。圭甫氏、蓋し焉を惜しみ、国字の訳を成す所以かな。吾が逸史、曩に已に梓刻し、則ち明なる者の読みて知るべき者は既に博なり。斯の訳にして果たして海内に布かんや。盲なる者は亦明にして能く読みて知る者を得て亦復博なり。則ち其の流沢の入る人なり。益深なり。俚諺の作、盲俗の間に実に欠くべからざる者なり。

抑斯の訳は、事を記し辞を原ね、一に本編に仍りて、其の卷数亦本編のごときを得る。蓋し引蔓の国字を以て、含英の漢文を解し、覃葛の綿々たらざらんを得ざらんや。然るに、明にして約すこと此のごとくんば、善く整へ治むと謂ふべし。所謂良工独り苦しむ者は知るべきのみ。

夫此の圭甫氏の逸史に於けるがごときは、殆ど癖と成すに非ざれば得ざらんや。逸史既に素臣の業を已へ、乃ち逸史氏の九原の下に莞爾として、其れ將に我が日東にも亦一元凱有るを言はんとするを知る」と。是に序を為り、書きて以て還し送る。

嘉永己酉四月日

浪華処士並河朋來撰

【注】

二百有余年 大坂夏の陣の後の元和改元から嘉永二年までは二百二十五年になる。

皤皤含哺、熙々鼓腹 髪の真っ白な老人が食べ物を口に含み、嬉々として腹をうつつこと。平和な世の様子を表す。『莊子』馬蹄に「含哺而熙、鼓腹而遊(哺を含みて熙び、腹を鼓して遊ぶ)」、また『十八史略』帝堯陶唐氏に「有老人、含哺鼓腹(老人有り、哺を含み腹を鼓うち)」

とある。¹⁹⁾

吾外祖 寒泉の外祖父・中井竹山。

逸史之撰、所由作 『逸史』撰の理由にあたる「四海謠承平」以下の文は、

『逸史』自序「以_レ阪府係_レ豊氏_ノ墟_ニ也。士人往々閑_レ前代之発滅_ヲ。偽_レ造_シ奇説_ヲ。以_レ鳴_レ旧閑_ヲ。不_レ復念_レ今日熙洽之沢_ヲ。是皆可_レ惜_ム之甚_キ也。」および『逸史』卷十二の本文末「自_レ元和止戈。到_リ于今_ニ。十有三紀。天下又安。文恬武嬉。恩逮_レ萌隸_ニ。而威加_{ハル}窮髮_ニ。隆治之沢。為_レ前古無_レ比焉。盛_{ナル}矣哉。於乎是誰_ノ力_ヲ与。事非_レ偶然_ニ也。」²⁰⁾を踏まえるか。『増補改訂版懷徳堂事典』によると、『逸史』は「自序によれば、大坂の人々が豊臣貞房で、家康の功績を正当に評価せず、悪口ばかり言うので、この書を著したとのことである」とある。²¹⁾

予受説 「予」の字は原本では「々」だが、直前に句点を入れたため「予」に改めた。

懿矣哉 よいなあ。「懿」は、よい、りっぱ。

明有千矣盲亦千矣 日本のことわざ「目明き千人盲千人」で、世の中には道理のわかる人もいれば、わからない人もいるということ。

曩已梓刻 「曩」は以前。『逸史』を嘉永元年に公刊したことを指す。

流沢 世に及ぼされた恩沢。『荀子』礼論に「積厚者流沢広、積薄者流沢狭也(積厚き者は流沢広く、積薄き者は流沢狭し)。²²⁾

抑斯訳也、記事原辞、一仍本編、而其卷数亦得如本編 『逸史俚諺』が事実

を記し表現を求め、ひとえに『逸史』の本編にしたがって、同じような巻数にすることを可能としているという意味。しかし、『逸史』は首一卷本編十二巻から成り、²³⁾一方の『逸史俚諺』は三十巻であるため、『逸史俚諺』の巻数は『逸史』本編の巻数に近いとはいえない。ただし、向陽の著作には『逸史俚諺』以外にも『逸史』を訳述した『竹山逸史』なる著作があり、それがまさに十二巻である。現存する『竹山逸史』のうち、国立国会図書館所蔵本と内閣文庫所蔵本に『逸史俚諺』のような序文は存在しない²⁴⁾が、瞥見したところ、『逸史俚諺』と『竹山逸史』とは目録に違いはあるものの、両者の本文自体は共通する部分が多い。そのため、寒泉の序文作成に『竹山逸史』十二巻が関係している可能性も考えられるが、それについては今後の課題とする。

引蔓 蔓が伸びること。杜甫の「新婚別」に「兔糸附_レ蓬麻_ニ 引_レ蔓_ノ故不_レ長

(兔糸 蓬麻に附し 蔓を引くこと 故より長からず)」とあり、『文選』古詩十九首・八の「君と新婚を為す、兔糸 女蘿(サルオガセ)に附く」を借りるといふ。²⁵⁾「兔糸」「女蘿」は蔓草の名。「蓬麻」はよもぎとあさのこと、蔓草が絡むことのできない植物。『文選』古詩十九

含英

首・八は次の「含英」の注で引用する。

「浸醞郁、含_レ英咀_レ華、作_レ為_レ文章、其書滿_レ家(醞郁に沈浸し、英を含み華を咀ひ、文章を作爲し、其の書家に満つ)。²⁶⁾とある。なお、「引蔓之国字」と「含英之漢文」との対句表現は、杜甫「新婚別」の「兔糸附_レ蓬麻 引_レ蔓_ノ故不_レ長」(「引蔓」の注参照)および『文選』古詩十九首・八の「冉冉生竹 結_レ根泰山阿_ニ 与_レ君_ノ為_レ新婚_ニ 兔糸附_レ女蘿 兔糸生有時 夫婦会有_レ宜 千里遠結_レ婚 悠悠隔_レ山阿 思_レ君令_レ人老_ニ 軒車来_レ阿屋 傷_レ彼蕙蘭花 含_レ英揚_レ光輝 過_レ時而不_レ采 将_レ随_レ秋草_ニ萎_上 (冉冉たる孤生の竹 根を泰山の阿に結べり 君と新婚を為す 兔糸の女蘿に附くがごとく 兔糸の生ずるに時有り 夫婦の会するに宜しき有り 千里に遠く婚を結び 悠悠として山阿を隔つ 君を思へば人をして老いしむ 軒車の来たること何ぞ遅き 傷む彼の蕙蘭の花の 英しさを含んで光輝を揚ぐるに 時を過ごして采らずんば 将に秋草に随ひて萎へんとするを)。²⁷⁾を踏まえたものか。(以上の傍線・二重傍線は引用者)

蔓葛

葛の覃。『詩経』国風・周南の「葛覃」に「葛之覃兮 施_レ于中谷_ニ 維_レ葉莫_レ莫_ニ 是_レ刈_レ是_レ漙_ニ 為_レ絺_レ為_レ紵_ニ 服_レ之_レ無_レ數_ニ (葛の覃 中谷に施ひ 維れ葉 莫莫たり 是に刈り是に漙て 絺と為し紵と為し 之を服して數ふ無し)とある。これは「葛の覃は、谷間にのびて、その葉はこ人もりと茂る。(その蔓を)刈りとり煮こんで絺となし紵となし、(祭服にして)これを着ていとわかない」という意味であり、「絺」「紵」は「葛を材料に作る布で、目の細かいものを「絺」といい、目の粗いものを「紵」という(『説文』)とある。²⁸⁾「覃葛」は、『詩経』のこの句を暗示し、あとの「良工独苦」にも関係する。

綿々

長々と伸びること。『詩経』国風・王風の「葛藟」に「綿綿葛藟 在_レ河之澗_ニ (綿綿たる葛藟 河の澗に在り)。²⁹⁾とある。あとの「良工独苦」にも関係する。

約

縮める。漢文体を日本語に訳述すると文が長くなるはずであるが、『逸史俚諺』では簡潔に訳述しているということ。

良工独苦

すぐれた職人が作品を作るためにひとりきりでたいへんな苦勞をすること。杜甫の「題李尊師松樹障子歌」に「老夫生平好奇古 对此興_レ与_レ精靈聚 已知仙客意相親 更_レ覺_レ良工心独苦 (老夫生平好奇古 对此此れに対して興_レ精靈と聚まる 已に知る仙客の意相い親しむを 更に覺ゆ良工の心独り苦しむを)。³⁰⁾とある。また、「良工」については、『説苑』尊賢の「詩_ニ曰_ニ、綿綿之葛在_レ於曠野_ニ、良工得_レ之_ヲ以_レ為_レ絺紵_ニ」。

良工不_レ得、枯_レ死於野_ニ」³¹)も踏まえていると考えられる。これは、人材も用いられなければ能力を發揮することなくむなしく埋もれてしまふというたとえで、「詩_ニ曰」とあるように、「綿綿之葛在於曠野_ニ」は『詩経』国風・王風の「葛藟_ニ」に「綿綿葛藟 在河之滸_ニ」(「綿々」の注で引用)とあるのを踏まえ、「得_レ之_ヲ以_テ為_ス絺紵_ト」は『詩経』周南・国風の「葛覃_ニ」に「是刈是漉 為_ス絺為_ス紵_ト」(「覃葛」の注で引用)とあるのを踏まえている。

癖 『逸史』を研究する癖のこと。杜預に左伝癖があったように(あとの「元凱」の注参照)、向陽には逸史癖があった、癖でもなければ『逸史俚諺』のような訳述はできないという意味。

逸史氏 竹山のこと。『逸史』題辭に「箕陰逸史氏同関子」と署名している。

九原 墓。「九原」は、戦国時代に晋の卿大夫の墓地があった地名。そこから転じて、墓場、よみじの意となった。

莞爾 につこりと笑うこと。

日東 日本のこと。中国から見て、日の昇る東方の国の意。『和爾雅』卷一「日本国_ノ異名_ニ」に「日東_ト」の説明として「華人称_{シテ}日本_ヲ為_ス日東_ト自_リシテ古_ク而_シ然_リ」近世宋景濂作「日東_ノ曲十首_ヲ」³²)とある。

元凱 三国時代末期、西晋の將軍・学者であった杜預の字。杜預は『春秋左氏伝』の研究に没頭し、自ら「左伝癖有り」と称した。『晋書』列伝四の「杜預」に「預常称_シ有_ス馬癖_ト、嶠有_ス錢癖_ト、武帝聞_シ之_ヲ、謂_フ預_曰、卿有何癖_ト、对_曰、臣有_ス左伝癖_ト」³³)とある。向陽を元凱に重ね、我が日本にも元凱がいるとして『逸史俚諺』に賛辞を贈っている。

嘉永己酉 嘉永二年。

並河朋来 「朋来」は寒泉の名。

三、終わりに

以上に紹介した『逸史俚諺』序文から、向陽(圭甫)が『逸史俚諺』を送ってその序文を求め、寒泉(朋来)がそれに応じたということがわかる。向陽は、他ならぬ『逸史』の公刊を実現させた寒泉に、その公刊から間を置かず序文を依頼し、作成してもらっていた。いわば、寒泉のお墨付きを得ていたのである。このことは、『逸史俚諺』に刊行の動きがあったことを推測させる。結果的に『逸史俚諺』は刊行には至らなかったが、『標疏箋註蒙求校本』の出版以前に、向陽の著作にそのような動きがあったことは注目に値することであろう。一方で、向陽がどのような経緯で『逸史俚諺』の序文を依頼し、寒泉がどのような

意図や条件でそれを了承したのかは不明であるため、向陽と寒泉や懷徳堂との関係については今後調査を行う必要がある。しかし、この序文は、両者に(交流の程度は別として)接触があったことを確かに示している。管見の限りでは、このことを指摘している先行研究はないが、『逸史俚諺』序文は、向陽と当時の知識人との直接的関係を示す数少ない一次資料と言えよう。

付記

本稿は「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業における女性研究者研究費支援」の助成による研究成果の一部である。

本稿を成すにあたり、宇部工業高等専門学校畑村学教授にご教示を賜った。また、資料の閲覧・複写については諸機関の皆様方に便宜を図って頂いた。記して深謝申し上げます。

注

(1) 文部省総務局編『日本教育史資料 三』再版(四七〇頁 文部省 一八九〇年、富山房 一九〇三年再版)、山口県教育会編『山口県教育史 上』(二〇三―二〇六頁 山口県教育会 一九二五年) 参照。

(2) 早川光三郎氏著の新釈漢文大系『蒙求 上』(六八―六九頁 明治書院 一九七三年)の解説では、日本における蒙求の注釈本諸本について、岡白駒箋注本は「明和四年(一七六七) 初版以来、版を重ねること数を知らず、殊に佐々木向陽がその上に「標疏」を加えて後、幕末から明治初期にかけて、士民の教科書として最も行なわれたので、その需要に必ず、各書店で競って刊行した」とあり、さらに向陽の『標疏箋註蒙求校本』は安政五年(一八五八)に刊行された後、明治四年・明治十三年三月・同年七月・明治十五年五月・同年七月・同年八月・明治十八年等にも出版されたのである。なお、向陽は万久三年(一八六三)に没しているため、明治四年以降の出版には向陽の直接的関与はない。

(3) 向陽の名・字・通称・号については、渡辺翁記念文化協会編「宇部先輩列伝2 佐々木向陽」(『大宇部』第八号 渡辺翁記念文化協会 一九三七年十二月十日)、山田亀之介氏『宇部郷土史話』(一九三―一九五頁 宇部郷土史文化会 一九五五年)、江口茂一兵衛氏「佐々木向陽」(『宇部地方史研究』第五号 一九七六年十二月)による。「宇部先輩列伝2 佐々木向陽」は向陽の墓碑に基づくと推測される。山田氏と江口氏はその墓碑を取り上げ、山田氏は訓読文を、江口氏は漢文を載せている。また、「向陽」を「しようよう」と読むのか「こうよう」と読むのかは先行研究によって異なる。「宇部先輩列伝2 佐々木向陽」と堀雅昭氏『いぐらの館ものが

たり——中川令辰とその周縁——』(三四一三七頁 阿知須地域づくり協議会 二〇一八年)は「しょうよう」というルビを振っているが、吉田祥朔氏編『増補近世防長人名辞典』(山口県教育会 一九五七年、マツノ書店 一九七六年増補)は「コーヨー」、市古貞次氏他編『国書人名辞典 第二巻』(岩波書店 一九九五年)は「こうよう」としている。江口氏は、「向陽」の由来は阿知須(向陽の自宅があった)と東岐波(岐波は阿知須と宇部の間に位置する)の間にある日ノ山の別名「向陽山」であるとしている。「向陽」が向陽山(シヨウヨウザン)にちなんだ号であるとすれば、「しょうよう」が正しいか。なお、江口氏は向陽の義兄・江口牛鳴の孫(向陽の妻・岸の姪孫)に当たる人物である。

(4) 先行研究では「勝木」ではなく「直木」という説もあったが、江口茂一兵衛氏が「佐々木向陽と佐々木松墩について」(『宇部地方史研究』第三号 一九七四年十二月)と「佐々木向陽」(前掲注3)において調査を行い、「勝木」と断定している。

(5) このときの遊学先がどこであったのか、行き帰りいずれの途次だったのかは先行研究によって異なる。江戸からの帰る途中(大坂から海路)だったとするのは、「宇部先輩列伝2 佐々木向陽」(前掲注3)、阿知須町役場編『阿知須町郷土誌』(一三二一—一三八頁 阿知須町役場 一九四一年)、防長新聞編「わが町わが村の明治維新(2)」(4) 福原家の文学者佐々木向陽 その1〜3」(『防長新聞』一九六八年一月三十一日、二月二日、二月五日)、中野真琴氏『あじす史話』(二四四—二五三頁 阿知須町役場 一九六九年)である。江戸へ行く途中だったとするのは、江口氏「佐々木向陽」(前掲注3)、堀氏(前掲注3)、森川潤氏『青木周蔵——渡独前の修学歴』(五九—七七頁 丸善出版 二〇一八年、初出「青木周蔵の渡独前の修学歴(2)」——漢学の修業時代——』『広島修大論集』第五〇巻第二号 二〇一〇年二月)である。阿知須町史編さん委員会編『阿知須町史』(五三—九一—九四頁 阿知須町 一九八一年)は、「長崎、江戸間の往來の途次」(傍点は引用者)として往路か帰途かの断定は避けている。三井誠之進氏『佐々木向陽先生伝』(作成時期不明、一九一四年に三井氏本人が山口県立山口図書館に寄贈。請求番号[Y289/S475])。三井氏の詳細については後述)には「先生壯歳京都ニ上リ、医術ヲ研メント欲シ、途次、赤間関ヲ過ギ、暫ク留マリテ」(読点、濁点は引用者)とあり、京都に行く途中だったとしている。なお、江口氏は、向陽がこの地に留まることになったのは、「江戸行の途中、船が難破して、丸尾へ避難した」ところ、「東岐波の庄屋が彼を見て非凡な人物と思ひ、阿知須浦の江口牛鳴(茂兵衛)に知らせ」た牛鳴が「阿知須に住んでもらうように再三嘆願し」、「妹の岸を娶わせ」た

からだとして、台風の記録と向陽の娘が生まれた時期から、向陽が周防国に留まるきっかけは天保三年(一八三二)のことだったとしている。一方、森川氏は、天保三年に江戸に向かう途次に船が難破したためだとしているが、江口牛鳴が阿知須浦にとどまるよう向陽に懇請したのは文政十一年(一八二八)だとしている。

(6) 「宇部先輩列伝2 佐々木向陽」(前掲注3)では、向陽は青莪堂の学頭として招聘される以前、すでに晩成舎(後、晩成堂)で子弟を教えており、弘化三年(一八四七)に青莪堂の学頭になったとしている。青莪堂の学頭としては、宇部市史編纂委員会編『宇部市史 通史篇 上巻』(九八—九九頁 宇部市 一九九二年)には、中臣通格待遇で迎えられたとある。中臣通とは、森川氏(前掲注5)によると「萩本藩の一門に次ぐ寄組相当する上級家臣である」という。また、佐々木姓を名乗る経緯についての初出は『阿知須町郷土誌』(前掲注5)で、「当時は領内の人でなければ(師範役に…引用者注)挙用が出来ぬ制であった」ためだとしている。なお、晩成堂が青莪堂と改称された年および福原邸内に移された年には諸説あるが、宇部市史編纂委員会編『宇部市史 史料篇 上巻』(四一七—四二二頁 宇部市 一九九〇年)記載の「青莪堂記」が「弘化乙巳(弘化二年のこと…引用者注)夏 佐々木站謹識」であることから、弘化二年には改称されていたことになる。

(7) ①④に言及している先行研究は以下のとおりである。煩瑣を避けるため、先行研究を発表年順に記載し、①④のいずれに言及しているのかをその番号で示す。すでに引用した文献は、編著者名・書名(論文名)・発表年を記載し、その他は省略する。

- 渡辺翁記念文化協会編「宇部先輩列伝2 佐々木向陽」(一九三七年、前掲注3) ①③
- 渡辺翁記念文化協会編「宇部先輩列伝7 佐々木松墩」(『大宇部』第一三〇号 一九三八年五月十日 渡辺翁記念文化協会) ④
- 阿知須町役場編『阿知須町郷土誌』(一九四一年、前掲注5) ①③④
- 防長新聞社編「わが町わが村の明治維新(2)」(4) 福原家の文学者佐々木向陽 その1〜3」(一九六八年、前掲注5) ①②③④
- 中野真琴氏『あじす史話』(一九六九年、注5) ①②③④
- 笠井助治氏『近世藩校に於ける学統学派の研究 下』(三二—四一—三二六頁 吉川弘文館 一九七〇年) ①②④
- 藤村忠明氏「佐々木松墩先生の経歴について」(『山口県地方史研究』第四五号 一九八一年六月) ④
- 江口茂一兵衛氏「佐々木向陽と佐々木松墩について」(一九七四年、前掲

- 注4) ②
- 藤村忠明氏「佐々木松墩先生の遺稿その他における疑問点の解明について」(『宇部地方史研究』第一三号 一九八五年三月) ④
 - 市古貞次氏他編『国書人名辞典 第二卷』(一九九五年、前掲注3) ①
 - 森川潤氏『青木周蔵——渡独前の修学歴』(二〇一八年、初出二〇一〇年、前掲注5) ②④
 - 堀雅昭氏『いぐらの館ものがたり——中川令辰とその周縁——』(二〇一八年、前掲注3) ④
 - 『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第一〇号二〇一五年一月。
 - (9) 『佐々木向陽先生伝』については前掲注5参照。桐島氏前掲「佐々木向陽の伝記に関する諸問題(1)——著述類・三井誠之進『佐々木向陽先生傳』の紹介を含む——」(前掲注8)によると、三井家は寛文八年(二六六八)より酒造業を営んでおり、「十三代三井誠之進は、明治十年(一八七七)三月に生まれ、東京大学を卒業後、郷里床波(西岐波にある…引用者注)で家業の傍ら郷土史の研究をした」人物であるという。
 - (10) 森川氏(前掲注5)は①の逸話は取り上げていないが、向陽は「頼山陽と親交があり、『日本外史俚言抄』を著しているところから、『日本外史』も講じたとおもわれる」としている。なお、『日本外史俚言抄』は向陽の著作のうち、現存確認ができていないものの一つで、山陽と親交があったという明確な根拠は不明である。
 - (11) 森川氏(前掲注5)は、善我堂の名は熊本藩学時習館(辛島塩井はこの第四代教授)における学課課程の最終段階「善我齋」にちなんでいるとして、向陽と塩井との関係を示唆している。
 - (12) 前掲注8に同じ。
 - (13) 請求記号 [210.367]。なお、桐島氏が前掲「佐々木向陽の伝記に関する諸問題(1)——著述類・三井誠之進『佐々木向陽先生傳』の紹介を含む——」(前掲注8)で現存を確認したとするのも国立国会図書館所蔵本である。『逸史俚言』はその他、早稲田大学図書館所蔵本もあるが、未確認である。『逸史俚言』の紹介は、まだ原物の実見ができておらず、国立国会図書館から取り寄せたマイクロフィルム資料からの紙焼き写真を通して行うものであるため、書誌情報は実見した上で改めて報告する。
 - (15) 湯浅邦宏氏編著『増補改訂版懷徳堂事典』(大阪大学出版会 二〇一〇年) 九五―九六頁「逸史(いつし)」の解説による。
 - (16) 松本望氏「懷徳堂による『逸史』の出版」(『懷徳』八四号 二〇一六年一月)による。松本氏によると、「懷徳堂は『逸史』を懷徳堂において手寫させており、また写本の依頼があった場合懷徳堂は筆写料を取って写本を制作していた」という。なお、『逸史俚言』は、向陽の附言によると、嘉永二年よりも約二十年前に誤写の多い写本をもとに作られたことだが、この附言の意味するところについてはまた稿を改めて検討したい。
 - (17) 『増補改訂版懷徳堂事典』(前掲注15) 二二四―二二五頁「並河寒泉(なびかわかんせん)」同二二六頁「逸史上木(いつしじょうぼく)」の解説による。また、松本氏(前掲注16)によると、『逸史』が幕府への献上後すぐに出版されなかったのは、享保八年(一七二三)に大坂で出された「出版条目」に『逸史』が抵触するためであったが、その一方で、幕府が昌平坂学問所での教育に『逸史』を利用していたこともあり、『逸史』の重要性は高かったという。そのため、懷徳堂は『逸史』の制作や流布に規制をかけていたが、天保期の江戸で『逸史』が販売目的で出版されたことから、『逸史』の制作権と正統性を守るためにも、「出版条目」の改訂に呼応したように、『逸史』の公刊に臨んだと推測されるという。したがって、『逸史』の公刊には、幕府の意向も多分に影響していたとも言えるという。
 - (18) 翻刻ならびに【書き下し文】【注】の漢字は常用の字体に改めた。翻刻に際しては、段落を分け、句読点、括弧を付けた。【書き下し文】【注】については、適宜ルビを振った。なお、本稿で引用するテキストには、人権上問題となる表現が存在するが、原本の表記によるものであり、学問上の措置としてご理解いただきたい。
 - (19) 『莊子』馬蹄の引用は遠藤哲夫氏・市川安司氏著の新釈漢文大系『莊子下』(二二一―三二七頁 明治書院 一九六七年)、『十八史略』帝堯陶唐氏の引用は林秀一氏著の新釈漢文大系『十八史略 上』(一九二―〇頁 明治書院 一九六七年)。
 - (20) 嘉永元年刊、大阪大学附属図書館懷徳堂文庫所蔵『逸史』。デジタル請求記号 [DIGOSAKA00018]。新日本古典籍総合データベースに掲載の画像 (URL: <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100242585/viewer>) より翻刻。適宜、濁点、振り仮名を施した。
 - (21) 『増補改訂版懷徳堂事典』(前掲注15) 九五―九六頁「逸史(いつし)」の解説による。
 - (22) 『荀子』礼論の引用は藤井専英氏著の新釈漢文大系『荀子 下』(五四九頁 明治書院 一九六九年)。
 - (23) 『逸史』巻十二の巻末に「逸史全部十有三卷除_キ首卷_ヲ為_シ本編十有二卷_ト」本編通計十八万九千九百六十六言」と明記されている。なお、引用本文が掲載されている画像のURLおよび引用方針は注20に同じ。

- (24) ともに実見調査はできていないが、国立国会図書館本はマイクロフィルム資料からの紙焼き写真によって、内閣文庫本は国立公文書館デジタルアーカイブに掲載の画像（佐々木向陽編・竹山逸史・請求番号〔J50-0035〕）によって確認した。『竹山逸史』の諸本は他に、筑波大学附属図書館所蔵本、佐賀県立図書館鍋島文庫所蔵本があると考えられるが、確認はできておらず、いずれも今後調査を行う予定である。
- (25) 杜甫「新婚別」の引用および典拠（『文選』古詩十九首・八）の指摘は、川合康三氏著の新釈漢文大系『杜甫 上』（二二七頁 明治書院 二〇一九年）の本文・語釈による。
- (26) 韓愈「進学解」の引用は星川清孝氏著の新釈漢文大系『唐宋八大家文読本 一』（一〇三―一〇四頁 明治書院 一九七六年）。
- (27) 『文選』古詩十九首・八の引用は花房英樹氏著の全釈漢文大系『文選（詩騷編）四』（二三八―二四〇頁 集英社 一九七四年）。
- (28) 『詩経』国風・周南の「葛覃」の引用および解釈は、石川忠久氏著の新釈漢文大系『詩経 上』（一九二―二頁 明治書院 一九九七年）の本文・通釈・語釈による。
- (29) 『詩経』国風・王風の「葛藟」の引用は、石川忠久氏著の新釈漢文大系『詩経 上』（一九八―二〇〇頁 明治書院 一九九七年）。
- (30) 杜甫「題李尊師松樹障子歌」の引用は下定雅弘氏・松原朗氏編の講談社学術文庫『杜甫全詩訳注（一）』（六一―四一七頁 講談社 二〇一六年）。
- (31) 須原屋茂兵衛刊（刊年不明）、山口県立山口図書館所蔵『説苑』、請求記号〔W282.208/A〕を翻刻。適宜、句読点、濁点、振り仮名を施した。また、一部返り点を加えた。
- (32) 高橋章則氏は「近世後期史学史と『逸史』（『日本思想史学』第一九号 一九八七年三月）で『日本外史』も「外史氏曰」との表現になっていることに触れ、「基本的には『資治通鑑』の体裁であろう」としている。
- (33) 元禄元年（一六九四）刊、内閣文庫所蔵『和爾雅』、請求番号〔209-0019〕。国立公文書館デジタルアーカイブに掲載の画像（URL: <https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&ID=F10000000000042549&ID=M2019051009503256272&TYPE=>）より翻刻。合字は仮名に改めた。
- (34) 明崇禎十二年（一六三九）刊、内閣文庫所蔵『晋書』七、請求番号〔280-0031〕。国立公文書館デジタルアーカイブに掲載の画像（URL: <https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&ID=F1000000000000095268&ID=M2015091114254914899&TYPE=>）より翻刻。